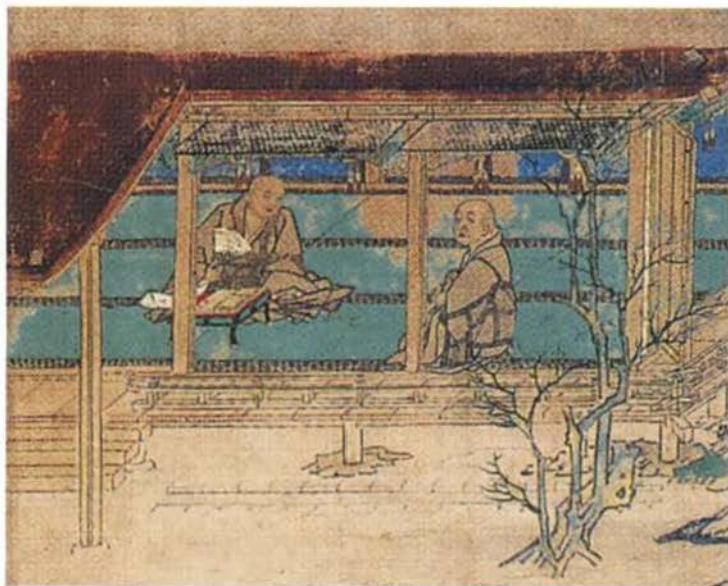


浄土

monthly
JODO

July · August 2001

7.8



日本テレコムで、
21世紀も
思いきりしゃべったろ。

市内も、県内も、県外も、国際も。
マイライン選ぶなら、日本テレコム。

OK!

マイラインまるごと、日本テレコム。



電話会社選択サービス
マイライン

平成13年1月10日申込受付開始
平成13年5月1日サービス開始

マイラインの「日本テレコム」へ
お申し込み方法

「マイライン」「マイラインプラス」は、市内通話、同一県内の市外通話、県外への通話、国際通話の4つの通話区分で、ご利用になる電話会社を選んで登録する、電話の新しい制度です。月々のご利用料金はかかりません。日本テレコムをお選びになると、0088(国内電話)、0041(国際電話)などの番号を押さなくともご利用になれます。現在、日本テレコムにご加入の方の割引サービス等は継続してご利用いただけます。

日本テレコムにご加入の方へは直接、「マイライン申込書」をお送りいたします。未加入の方は、下記のお客センターまたはホームページへお問い合わせください。

※「マイライン」「マイラインプラス」は、NTT東日本・西日本のサービスであり、日本テレコムはマイライン事業者協議会のメンバーです。

●マイラインのお問い合わせは
お客様センターまたはホームページへ ☎ **0088-82** (無料) (受付時間) 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ
<http://www.japan-telecom.co.jp/>

インターネット(ODN)も、携帯(J-PHONE)も、通信まるごと日本テレコム。

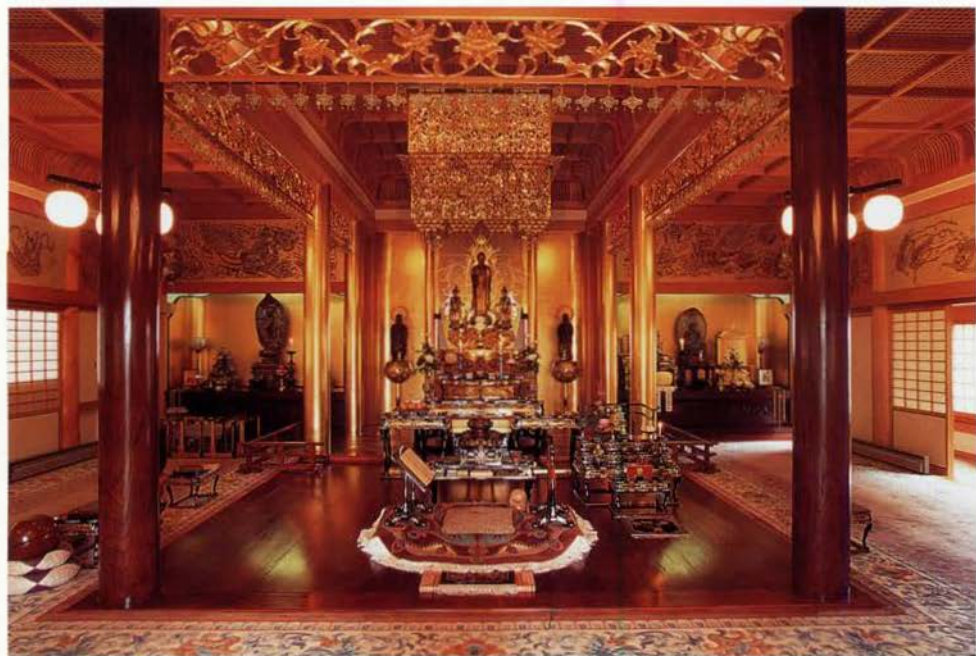
寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

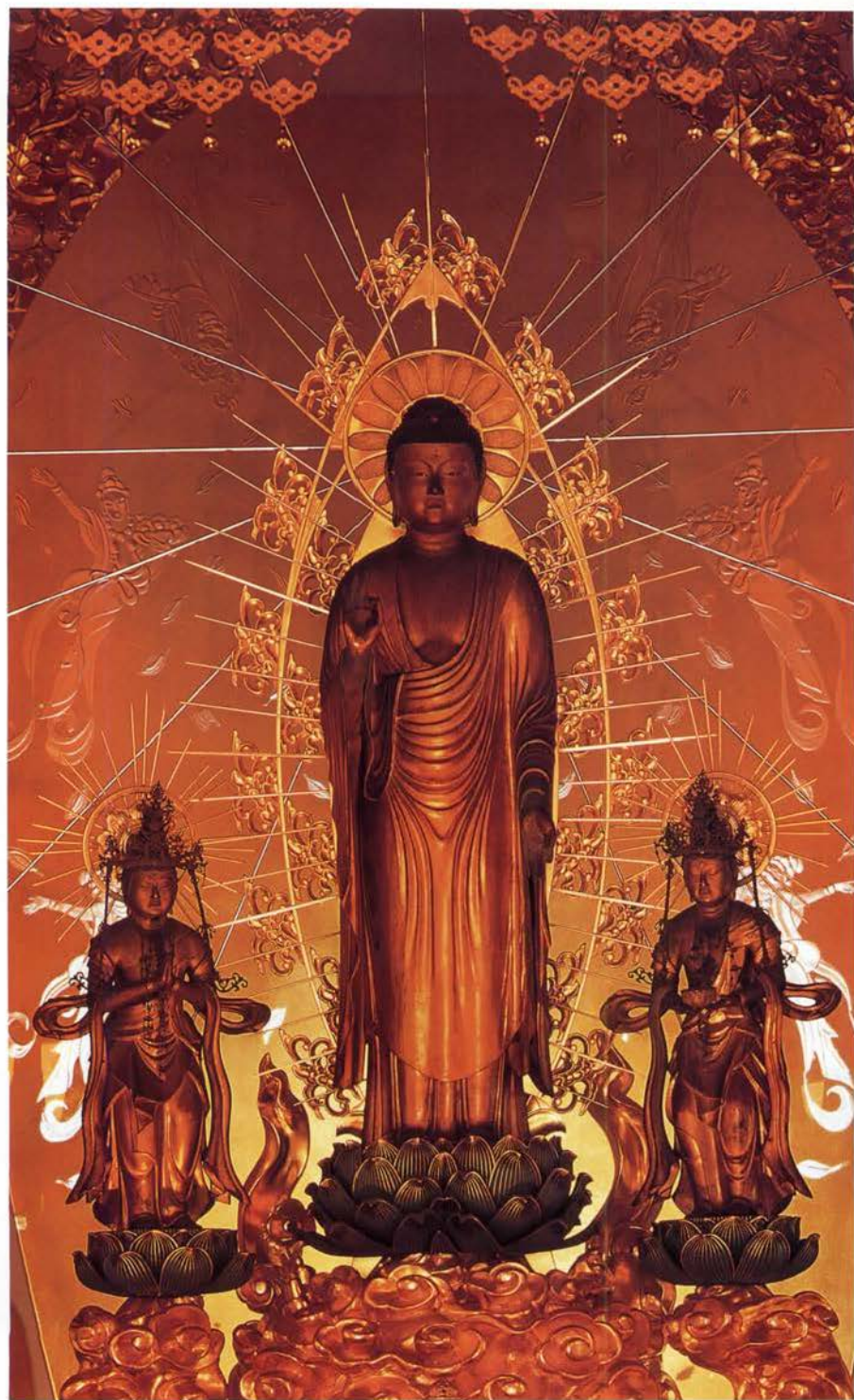
尼崎

甘露寺

甘露寺第三十五世、三枝樹隆善住禪と
民栄夫人



平成三年に建立された極楽鳳停殿（本堂）内陣



「現世に極楽浄土を」という想いで荘厳された本尊、阿弥陀三尊

外観に旧本堂の面影を残している東向きの新本堂



二河白道をあらわした中庭。
中央飛び石を白道に見立てている



法然上人が使われた袖釜。
甘露寺の大切な寺宝だ



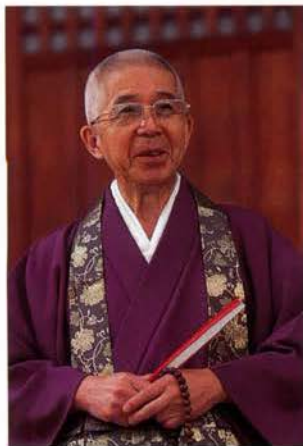
讃岐に流される法然上人が遊女に
念仏の教えを説いた史跡の遊女塚



兵庫県と大阪府の境を流れる中島
川の河口。尼崎はこの川の運ぶ土
砂で広がってきた



尼崎城の城址。現在は図書館になっている



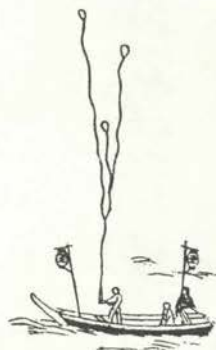
甘露寺第三十五世三枝樹隆善住
職。穏やかな中にも強い意志を感じさせる人柄だった

浄土

2001/7・8月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 尼崎甘露寺	写真＝タカオカ邦彦	1
法然上人のお歌	藤堂恭俊	6
表紙の言葉	宇高良哲	13
寺院紀行 尼崎甘露寺	真山 剛	14
法然様を讃える大河の一冊	石丸晶子	22
響流十方	小村正孝	34
くすり箱	市川真人	38
Jフォーラム		47
誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	51
編集後記		52

表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎



平成十二年五月十八日 増上寺聖歌隊主催 法然上人おうたの研修会 第2回

さへられぬ

光もあるを

おしなべて

隔て顔なる

朝霞かな

前編

大本山増上寺第八十六世法主
藤堂恭俊

今日は「春の御詠歌」という題がついてお歌についてお話致します。

「さへられぬ 光もあるを おしなべて へだてがほなる あさがすみかな」つまり「阿彌陀様のお慈悲の御光は、さえぎろうとしてもさえぎることができませんが、朝霞が春の光を一樣に隔てるように、疑い迷う心がお慈悲の光を隔ててしまいます。しかし阿彌陀様は、たとえ疑い迷う心を持っていてもお念仏する人であるならば、その人を照らし救いにつけてくださいます」という意味と大体とることが出来るお歌でございます。そこで少し丁寧にお歌を、頂戴させていただきたいと思えます。

先ずこの「さへられぬ光」でございますが、『無量寿経』というお経の上巻に、阿彌陀様のことを讃えながら、「無量光佛 無邊光佛 無礙光佛 無對光佛 焰王光佛 清淨光佛 歡喜光佛 智慧光佛 不斷光佛 難思光佛 無稱光佛 超日月光佛と号したてまつる」と。このように無量寿如来には阿彌陀佛を十二通りの光明でもって捉えることが出来るということがかかれています。その中の第三番目に、「無礙光佛」ということが出てきます。つまり阿彌陀様は、無量寿佛、更には無量光佛と、二つの無量という表現で阿彌陀様の属性を捉え、阿彌陀様は時間的には無量寿でいらつしやる、さらに空間的には無量光に坐すと説明されています。梵語では阿彌陀はアミタでございますから、それにアミターユスとなって無量寿、アミターバとなって無量光佛と、このように阿彌陀様の属性を、ユスとバとなっておるわけでございますが、その中でこの『無量寿経』に因りますと、十二光の第三番目に無礙光とあり、遮るものがない光明であるといっているのです。

その光明につきまして、『阿彌陀經』では、「かの佛の光明無量にして十方の國を照らすに障礙するところなし。この故に阿彌陀と号す」と説かれ、かの佛というのはもちろん阿

彌陀様をさして、西方極樂に坐すその佛様は光明無量であつて、しかも照らすこと自身に差し障りがないというように受け取ることが出来ます。この『阿彌陀經』は中国でもうしますと、六朝の初期、孟子の時代です。その秦の国の姚秦代の鳩摩羅什という方の翻訳であります。その次の時代になりますと唐の時代には有名な玄奘三蔵が出てきます。このお二人の訳は全然違うわけでございまして、鳩摩羅什さんの訳は文学的で大変綺麗です。ところが玄奘さんの訳は、これはもう文法に則して訳されておるといふことで、文体としては滑らかではないわけです。そして比較をしますと、「十方の國を照らすに障礙」がないと、ただ照らすことに差し障りがないのかと思ひますけれども、異訳であります『稱贊淨土仏撰受經』というお經があり、日本では『阿彌陀經』より古く、寫經にはこの經の方が用いられて、奈良朝時代の寫經の中に残っております。この經の中に「かの如来、恒に無量無邊の妙光を放つて遍く一切十方の佛土を照らし」、そこまでは大体一緒にございしますが、この次に「佛事を施作して障礙あることなし」と、「佛事を施作」するとかかれています。佛としてのはたらきでございしますから、衆生に向かつてのお仕事ということになります。しかも施すという字が書いてございします。施しを為すという。だから化他のはたらきを阿彌陀様として、念佛を申す衆生に対するはたらきには差し障りがないということになります。つまりただ照らすことに差し障りがないというのと、はたらきにおいて差しさわりのないというのと、捉え方が違います。阿彌陀様が、光を以てこの十方の國を照らしなさる。照らされるその國の中には色々なお人がおいでになる。そのお人がただ照らされているだけなのか、更にもう一步踏み込んで、佛様のおはたらきを頂戴しているのかと、そういうようなところがございします。

だから「さへられる光」ともうしましても、ただ「月影のいたらぬ里はなけれども」ということで、念佛申しても申さなくても、阿彌陀様の光明によって包まれているんだ。それをその様に自覚する人と、自覚しない人とがありますけど、そういうことに関わりなく、男でも女でも、いろんな人が差別を超えて一律平等に、阿彌陀様の光明によって、照らし出されているということです。また更には「ながむる人の心にぞすむ」ということで、「南無阿彌陀仏」御名をお称えすると、その光明を自分自身が頂くことによって、阿彌陀様の御子として生まれ変わるといふ、そういうはたらきを頂戴することともいえるのです。

先般月影のお歌のところで申し上げたと思いますが、光明には色光（物質の光）と心光（心の光）があり、仏教では普通光明は心光を指すといわれています。そして心光には常光（長時不斷に照らす光）と神通光（特別のときに照らす光）があり、前半の月影のいたらぬ里がないというのは阿彌陀様の心光つまり常光であり、後半のながむる人の心にぞすむは神通光を表現したわけですが、阿彌陀様の光明に二通りあるということではありません。それを受ける側からしますと、その様になるということなのです。お念佛を申さない人は、たとえどのように光明のまった中で生活をさして頂いていても、そのことに気がつかないのでございます。ところがお念佛を申すことによって、阿彌陀様の波長、光明の救済の波長がびったり合いますから、阿彌陀様のお働きを、一気に心に頂戴することが出来るわけでございます。

まあそういうようなことで、「さへられぬ光」というのは、ここでは阿彌陀様の光明には間違いないのでございますけれども、そのようにして、「さへられぬ光もあるをおしな

べて「へだてがほなるあさがすみかな」「おしなべて」というのは、皆がその様にして阿彌陀様の、障碍することが出来ない、光明のまった中に包み込まれながら、しかも、皆が皆おしなべて、「へだてがほ」です。知らん顔していると、それは丁度この春霞のよくなもので、遠くに山がありましても、霞によって遠い山が見えないようなことになっているという、結局、春の情緒といえますか、そこに確かに山が、この桜の木の向こうに、当然山があるのだけれども、春霞に障碍されて、邪魔されて、ぼやつとあるようなないようなことであると、まあ春らしい気分をお歌い下さっております。

いつてみればこれは、信仰がない、関心がないという方には、救いがそこに確かにあるのだけれども、関心がないとまったくわからない、そういうことでございます。たとえばお使いなんかに行つて、教えられる時には「どういふ店があつて、その有名なお店の三軒程向こうや」と教えられて行くわけでございます。そういう暗示をかけられて行きますと、目標になる薬局なら薬局ばかりを目当てにして行きますから、当然その周りにあるお店のことは一向に頭の中には入つてないわけでございます。そういうことに関心がない場合には、あるものもないのに等しいわけです。そのように確かにあるんだけれども、それに心を寄せていないということでございます。だから心を寄せないというお方のことを、ここでお歌いになったんであらうと、思うのでございます。

次にその光明とは一体何なのかということ、少し考えてみようかと思ひます。

これは、「安楽國土の光明は如来の智慧の報いより起こる。故に能く世の闇冥を除く」という文が曇鸞『無量壽經論註』上巻にございます。同じ偈文についての上巻の解釈と下巻の解釈を二つ並べてみますと、

「彼の土の光明は如来の智慧の報いより起こる」と、ここまでは一緒にございます。「これに触れる者は」と、こういうことは上巻には書いてありません。「これに触れる者は無明の暗闇終に必ず消除す。光明は慧に非ずして能く慧の用を為す」と下巻にあります。

智慧の報いより起こるということは、両方に書かれてあります。ところが、下巻の方には、その光明というものは、智慧の報いより起こったはたらきであるけれども、「慧に非ずして能く慧の用を為す」と、このように、智慧の説明をしてあります。

難しいことだと思いますと、このように、智と慧とははたらきが違うわけでございます。梵語では智は闇那であり、慧は般若であります。わたし達があだこうだといって、思慮分別をする、その思慮分別を超えたものでございすから、無分別智ともいいます。真如とか法性とかという言葉でも表されます。「あの人は無茶なことをする」と、「言語道断」なんていいですけど、その言語道断というのもここから来ている訳でございす。表現が出来ないということでございます。わたし達がいろんなことを経験します。経験をしますけれどもその経験したことをそっくりそのまま文字に表現することは到底不可能です。そういう、我が身を通して得たもの、それは内容からいいますと、個々の対象を的確に捉えて、それに対してはたらきをするわたし達が、その上でそれにはたらきかけていくことでございす。般若とは、真如とか法性とかいうように理に通じる、行の名前でございす。普通は心が外の世界にはたらいで、「これは木である」「これは花である」と、判断をするのが分別です。ここでいう心行消滅ということとは、この心が外にはたらかない、はたらく心を止めることによって、相対を超えた心に入るわけでございす。普通は、主体と客体とに分かれますが、主体がこちらにはたらいで判断するのが、普通の思慮分別でござい

ます。けれども心行消滅というと、外にはたらく、そのはたらきをなくすことによって、主体と客体のほかに入るわけです。そういうようなことをここでは智慧といいます。丁度、お医者様が、「この方はどういふところが悪いか」ということをちゃんと見極める、その個々の病気の違いを的確に捉えて、「この方はここが悪いんだ」と、いふように判断されるのと一緒にございます。だから感情的に「あの人困つてゐるから何とかせにやいかん」と、いふような、そんなもんじゃないのです。もつと根がしっかりしてゐて、ただその時の感情によつて、「あゝ可哀想だなア」と、何とかしましょう」なんていう、そういうフラフラしたもんじゃないのです。どこが悪いから、どこをどういふように押さえれば、このお方の病氣、困つておられるところを、解消することが出来るかという、そこまで、智慧がはたらいて、初めて救済の手を差し伸べるわけでございます。

光というものは、そういうようにして、阿彌陀様の一番大事な、おさとりを踏まえてゐるのです。阿彌陀様がどういふおさとりを開かれたか、そんなことは一向に言及しないのが、わたし達の宗旨なんでございます。

(つづく)

法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

後白河法皇に御談義の図

これは法然上人が後白河法皇の御招請に応じて、宮中で浄土の法門について御進講している場面である。各種の法然上人伝記が法然上人と後白河法皇の親交の厚かったことを紹介しているが、その理由や時期を記しているものは少ない。その中でこの増上寺蔵の残欠二巻本の詞書は、次のように記している。法然上人は保元元年（一一五六）二十四歳の頃から叡山を離れて、各地の碩学を訪ね、法相・三論・真言などの諸宗を修学し、たちどころに成果を収められた。

「かやうのことども法皇聞き召されて御招請ありて、終日の御談義あり、法門の悟りの趣、御感浅からず」

この記述は承安五年（一一七五）の四十三歳の立教開宗以前に所収されている。このように立教開宗以前から法然上人は後白河法皇に認められ、帰依されていたことがわかる。そのためか後白河法皇の一門には、上西門院統子内親王・八条院暲子内親王・高倉天皇・殷富門院亮子内親王・承如法式子内親王・宣陽院観子内親王・後鳥羽天皇など法然上人の帰依者が多い。

(宇高良哲・大正大学教授)

寺院紀行

尼崎

甘露寺

撮影／タカ才力邦彦
文／真山 剛



山門から見る本堂。美しい練木が印象的だ

この五月末日、「真珠の首飾り」という劇を東京調布に見にいった。このタイトルの真珠とは日本国憲法を意味している。そしてGHQが作り上げた今の憲法を日本政府が自国案として受け入れた歴史を、グレン・ミラーの同名の曲と重ね合わせたのである。

日本国憲法の成立過程を題材にしたこの劇の主人公は、子供の頃日本に長く住んでいた二十二歳のユダヤ系アメリカ人女性。彼女はGHQの民政委員として憲法草案スタッフの一人に名を連ね、人権、特に女性の人権に関しての条文作りに携わった。

「おんなこども」という言葉があるように、男性に絶対服従の当時の女性たちの人権確立に、その若き情熱をまさに言葉通り注いだ女性である。結果的に彼女の草案の多くは、憲法全体のバランスから削除されたが、現代日本女性の人権向上に果たした彼女の役割は非常に大きい。興味のある方は、彼女、ベアテ・シロタ・ゴードンさんの自叙伝をお読みいただくことをお勧めする。

さて、このベアテさんを現代日本女性の救い主とするならば、中世日本女性の救世者は、間違いなく法然上人である。

もう数年前のことだが、この連載にあたって、発行元の法然上人鑽仰会という名称を、漢字の難しさとともに、少々訝しがったことを思い出す。浄土宗の信徒ではあったものの、随分単刀直入で遠慮会釈のない名前に聞こえたからだ。しかし、その後の編集部の方々



寄棟の鳳凰。鳳と凰を一緒にした甘露寺ならではの発想だ



甘露とは、不老不死の飲み物のことで、釈迦の教えにたとえられる

や、取材先での浄土宗僧侶の法然上人の話、仏教書、さらにここ最近の一般メディアに登場する法然上人などを通して、その疑問は解消した。日本の宗教改革者ともいえる法然上人をストレートに讃仰する極めて的を得て妙な名前だと気づいたからである。

浄土宗に造詣の深い読者を前にまさに釈迦に説法だが、凡夫の自覚、悪人正機、そして念仏往生、法然上人はまさに日本の宗教改革者に違いない。そしてもうひとつ、法然上人の思想で忘れてならないのが、女人往生である。

法然上人が、晩年流罪となつて四国へ配流される時、神崎で船上の五人の遊女に念仏往生を説かれ、穢れ多き身と不安に苛まれる遊女に安心を与えたのは有名だが、それまでの、女性は一度男性に生まれ変わって往生するという思想を打ち砕き、法然上人は当時の女性に、それこそ生きる光明を与えたのである。まさに画期的な事であった。

その足跡が今も遊女塚として、兵庫県の尼崎に残っている。今回訪れた甘露寺は、その尼崎の寺町にあり、極楽浄土を表現した伽藍を再興した名刹である。

「本堂の再建、そして論文集の発刊。浄土学を四十年来にわたり学んできた者としての研究成果が、この二つです」とおっしゃるのは甘露寺第三十五世、三枝樹隆善住職である。寺町と呼ばれる一角で

外陣には涅槃像が飾られる。その上のおりあげもこの浄土堂ならではの造りだ



も、ひとときわ目立つ鳳凰が甘露寺のシンボルだ。

町寺という限られた敷地ゆえ、宇治の平等院のように「鳳」と「凰」の一对ではないが、本堂の寄せ棟の上に見事な「鳳凰」が佇んでいる。時折り、その後ろを伊丹空港へ向かうジェット旅客機が横切るが、大阪と淀川一本隔てた尼崎ならではの光景だ。

さて、この「鳳凰」に守られる極楽鳳停殿は、極楽浄土をこの世に再現した浄土堂であり、甘露寺の本堂だ。その建築様式、荘厳、本尊と、まさに極楽を思わせる見事な空間である。住職が、「このお堂の話をしたら三日三晩あっても足りません」と言うぐらい、色々な工夫や長年の想いがこもっている。

三日三晩どころか限られた誌面である、どうお伝えするかを考える間に、いま一度、尼崎の歴史に話を戻そう。

法然上人ゆかりの遊女塚だが、平安から鎌倉にかけて遊女がたくさんいた尼崎は、つまり人が集まる交通の要衝だったのである。もともと神崎川の洲として南に広がってきた尼崎は京都、大阪の海の入口で、京から四国に流された法然上人もこの海路の要衝、尼崎から瀬戸内海に出たのである。

海路が物資の大動脈であった当時、この尼崎は材木の集積地としても有名で、法然上人二十五霊場のひとつ、勝尾寺を始め多くの神社の材木がこの尼崎から運ばれている。同時に、尼崎は法然上人に



本堂正面の耳地藏尊



波受聖観音像。漁師町尼崎ならではの観音さまで、漁師の安全を約束してくれる像だ

帰依した関白九条兼実の九条家の荘園でもあった。このように尼崎は法然上人といくつもの縁で結ばれている地なのである。甘露寺にも、勝尾寺にとどまった法然上人が使った袖釜が残されている。

時を下つては、大阪の陣で徳川、豊臣の争奪地となり、さらに下ると阪神工業地帯の重化学工業地域、また日本一の火力発電地域として高度経済成長の日本を支えてきたのが、この尼崎である。

さて、この尼崎に甘露寺が延徳二（一四九〇）年、融蓮社円譽源永上人を開基とし創建され、現在地よりも少し東の大物町から江戸初頭の元和の頃に移ってきている。当時の尼崎は戸田氏鉄の尼崎城再建に伴う城下町作りの最中で、十七か寺がそれこそ隙間もなく軒ならぬ山門を並べた。今は十一か寺となったが、その面影を寺町としてきれいに残している。

甘露寺はその寺町の一角を占めるが、戸田氏から青山氏、そして松平氏と城主が変わり常行念仏堂として多くの念仏信者の集う浄土宗寺院となった。ちなみに、山門左手の薬師堂と山号の薬王山は、かつてこの甘露寺が真言宗であった歴史の名残りである。

この名刹が生まれ変わったのが、平成三年五月十九日。『浄土のかがやき』と題される立派な写真集で、その絢爛かつ厳かな落慶法要を見ることができが、三枝樹住職の積年の想いが結実した本堂再建である。

国道2号線に面する大物公園。合戦跡であり、城もあった要所だった



最寄りの駅の阪神電車尼崎駅から歩いて3分のところに甘露寺はある



完成後、住職が「三百年は大丈夫やろな」と棟梁に聞いたたら、「何言うてますねん。一千年は大丈夫でっせ」と即答された伽藍は、阪神・淡路大震災にも大きな被害を受けることはなかった。

さて、その甘露寺本堂、浄土堂だが、あと数百年後まで火災などに遭わずにこのまま残れば、間違いなく平成を代表する建築物として扱われるだろう。

正直にそう思う素晴らしさである。

阿弥陀三尊、大蓮台、光背、両大師、天蓋、欄間、折上格天井、といった建物内部の空間はもちろん、寄せ棟の屋根、特注の瓦や厳選された材木に当りきつての棟梁による妥協なき仕事。この連載で随分色々な伽藍を見てきたが、既に何百年という歴史を持つ国宝級の伽藍に比べても、この浄土堂はそうした建築物の創建当時を思わせる芸と粋とが息づいている気がする。

もちろん費用をかければ最高級の材料や職人さんを集めることはできる。しかし、突き詰めれば建築物も作り手の思想の具現化である。ましてや浄土堂という極楽浄土を具体的な形で表わそうとする時、その作り手、つまりプロデューサーの表現力や想像力が否応無しに目に飛び込み、あるいは肌に感じられてくる。三枝樹住職が長年あたためた研究論文にこのお堂を例えるのは、こうした物作りの苦しさや欲びの両方を味わったからに違いない。



かつての尼崎城内にあった櫻井神社。
日本赤十字社誕生の記念碑が建っている



とはいえ、その深い信仰にもとづいた住職の想いのあまり、総代を中心として組織された建設委員会が空中分解寸前までいったことがあるという。住職の妥協なき一途さに、応援者である建設委員が音を上げたというのである。もちろん、そこには費用面も含まれている。当初の予算を大幅にこえた費用だが、幸いにもパブルによる土地高騰で助けられることとなったが、このお堂完成までのやりとりは随分大変だったに違いない。

だがそれでも、心が込められた仕事によって建てられた、信仰の対象としての浄土堂が、いつまでもその想いを伝えていくことを考えれば、それもまた良し、ということだろう。

「良い物はいつまでも良くあり続ける」というのが住職の佛教大学の学生当時から信念だが、この本堂にももちろんそうした信念が、そして深い信仰が込められている。

西陽を窓越しに受ける阿弥陀三尊は、天女などの見事な細工を凝らした重さ百キロを超えるガラスの光背で、善光寺の一光三尊仏と同じ形式で包まれている。その蓮台の床には散華が描かれ、左右には善導大師と法然上人が、ずっと立った蓮の上に往生人の代表として安置されている。

前机などの仏具は、シンプルながらも白色のみの螺鈿で飾られていて、まるで上品な高級家具を思わせる。表裏から彫られている天

本堂四隅の四天王も、甘露寺ならではの、特徴あるものになっている。右から持国天、増長天、広目天、多聞天。



蓋、北京で作られた四十八畳がひとつの柄となつてゐる緞通（絨毯）も、回りをすべて蓮弁模様で囲むなど、その莊嚴のどれにも、本当に極楽浄土を思わせる工夫が凝らされている。

さて、この本堂にならぶ住職の信仰の成果が、平成四年に発刊された論文集『善導浄土教の研究』。これも装幀が半金色の善導大師を思わせる凝った作りで、住職らしさが滲み出ている。

そして今、次なるつぼみが膨らみ始めている。それは沖縄は宮古島の甘露寺別院布教所の立ち上げである。別院とは言うものの、宮古島初の浄土宗寺院を建立するため、弟子になつた地元出身の元平良市市長候補者が住職となり、念仏信仰の輪で地域をまとめていくことを目標としている。

この信仰で地域をまとめていく、という斬新かつ価値ある試みも含め、浄土学を学ばれてきた三枝樹住職の信仰の発露が、こうして次々と実を結んでいる。来年、喜寿を迎えられる住職だが、その揺るぎない信仰が次はどんな形となってくるのか、楽しみである。

最後になつたが、読者の中でこの世のうちに極楽浄土を感じたい方がいらつしゃつたら、ぜひ甘露寺の浄土堂を訪れることをお勧めしたい。なぜなら、そこには見事な莊嚴と住職の遙かなる想いが奏でる天上の「安養浄土国」が広がっているからである。

（ルポライター）



阿彌陀三尊の左右後方には、すっと立つた蓮華の上に善導大師像、法然上人像が往生人の代表として安置されている

梅原猛著 『法然の哀しみ』
を読んで

法然様を讃える 大河の一冊

石丸晶子

一、

数多い法然様の伝記のなかで、第一紙に「法然上人伝記附一期物語」としてなされた一巻がある。

勢観房源智の見聞をその弟子が忠実に記載したものともみられ、成立したのは法然様の没後三十年ごろ。江戸時代初期、京都醍醐寺の座主義演が書写したものが、同寺三宝院にあるところから『醍醐本法然上人伝記』（略称『醍醐本』）の名で知られている。早く法然諸伝を比較検討した三田全信氏は、この『醍醐本』をもっとも古く、もっとも信憑性の高い伝記として位置づけられた。

ところで、この『醍醐本』は法然様の出家登山の理由について、他の諸伝とは異なる記述をしているのである。つまり、他の諸伝が出家登山の理由を父時国の殺害事件に置いているのに対し、この伝記のみは十五歳で登山し、出家受戒したあと、父上の事件が起きた

と、勢観房自身が法然様から直接きいたと述べている。

梅原氏が法然伝の執筆を思い立たれたのは十年前、父時国殺害事件を登山後のこととする『醍醐本』の、特にその「別伝記」がしるす父の言葉に出会ったことによるという。

そこで以下、「別伝記」の記述をたどってみると、十歳のころ菩提寺に預けられた法然様は、十五歳のとき、観覚のすすめで叡山に登ることになった。その別れの挨拶をしに父母のもとへ赴くと、時国は、

「私には敵がいる。私は近く殺されるだろう。殺されたら菩提を弔ってほしい」と告げたという。

梅原氏の法然探求の旅は、時国のこのことばを礎にはじまった。氏はこのことばに行く手を照らされながら、回心体験以前、二十五年におよぶ法然様の、心の底の闇につつまれた苦悩の世界を探りあてた。さいごに残った原稿枚数千三百枚に対して、実際に書いた

た枚数は三千枚をこえるという大著であり、史料を博覧して思索すること十年におよぶ文字どおりの労作『法然の哀しみ』は、氏が探りあてたこの、法然様をつつんだ深い闇を追求していくところに成立している。

梅原氏の推測では、父時国・母秦氏殺害事件は、久安三年十一月十二日で、これは叡山での法然出家受戒の四日後になるという。

出家受戒して仏に仕える人生を新しく歩きはじめようとした矢先にとどいた父母殺害のしらせは、十五歳の少年勢至丸の心にどんなにか大きい衝撃と心の深い傷をつくったにちがいないが、史料を駆使した梅原氏の筆は、律令社会が音をたてて崩壊にむかいはじめた当時、各地でくりひろがっていたにちがいない中央政府から派遣されている荘園の預所と、地元役人押領使との、血で血を洗う暗闘をあぶりだしている。

ちなみに、現在使われる「横領」の語源は押領使の「押領」が転じたものであるという

が、氏の筆は、律令社会が崩壊していく過程において、職業上、修羅の世界に立たざるをえなかった時国の悲しみや悲劇をも照らしだし、独り子法然様を遠く那岐山麓の寺に預けることになったのも、

「法然を、自分のような命の危険をいつも覚悟していなくてはならぬ武士にたくはないと思ったのではなからうか」

「やがて起こる惨劇を予感し、法然を故郷久米の里から遠く離し、観覚のもとで仏教を学ばせたのであろう」としてしている。

そして数年、観覚のもとで学んでいた少年は叡山に登ることになった。別れの挨拶に父母のところへ赴いた少年に、『醍醐本』によると、父がはなむけのことばの代わりに「私には敵がいる。云々」といったことは、先にしるしたとおりである。

梅原氏は、この恐ろしい異様なことばでわが子の門出を送らねばならなかった程、この

とき時国をとりまく状況はせつぱつまり、定明一党との確執は来るべきところに来ていたのであろうという。

この事件を追求していく梅原氏の筆にはどこか鬼気迫るものがあり、押領使時国屋形の内外をおおう不気味な低い暗雲のなかに、読者自身がからめとられていくような凄みがある。

そして氏によると、この事件こそが、その後の法然様の歩みと生涯を決定づけた最大のものであった。

以上のようにこの事件を解釈し、位置づける梅原氏は、以後、法然様が悲嘆と苦悩と闇の底から、いかにして口称念仏ひとすじの道に辿りつき、切り開いていかれたかを本書において辿っている。

だが、『法然の哀しみ』の特徴の一つは、それが法然様の御生涯を年代的に辿るものではない豊かさや広がりをもっていることだろう。たとえていえば、この書は法然様をソロ

で歌うのではなくてオーケストラで讃え、語り歌う大河の一冊である。

まず初めに、なぜ今、法然様をとりあげるのが、その意義を問い、数多く伝わる御影を読み、諸々の伝記を比較検討して信頼に値するものとして『醍醐本』をとりあげた著者の筆は、ついで本書前半のピークであり本書全体からみても眼目というべき時国殺害事件の真相に迫っていく。

そして以後、父の事件を契機に隠遁の心をいっそう深めた法然様の回心体験・回心後の思想・教学・説法等々をのべた著者は、ついで晩年の法然様と流罪事件の解明へとむかうのである。

以上が大著『法然の哀しみ』の縦糸ならば、これに対する横糸として縦横におりなされるのが、善導の教学と人となりであり、九条兼実のことであり、信空をはじめとするもろもろの直弟子たちのことであり、安樂住蓮とその事件の真相等々である。

この横糸だけをすくいあげても、梅原氏によるこれは人間研究の宝庫というべく、『法然の哀しみ』一卷は、まさに、法然様の御生涯を中心にまわる「大まんだら」とも「一大交響楽」ともいふべき観を呈している。

ここでもし本書を大きく三区分するならば、第一部と第二部は、父時国事件をへて法然様の回心体験まで（第一部）と、立宗宣言から晩年の法難、そして入滅まで（第二部）であろう。

御生涯だけを辿るならばここで完了してもよいわけだが、著者はさらに第三部といえる「親鸞からみた法然」「悪と二種廻向」の二つの章を設け、終章に「阿弥陀の慈悲と勢至の智恵」を置いて本書をしめくくった。そして最終章は、オーケストラというべき大著の指揮棒をふるった著者が、いよいよ終りにあたって、今一度静謐な境地に立ちかえり、歌いあげた法然讃歌になっている。

仏教学、浄土学、歴史学、そして法然研究等の立場からすると、史料および伝承の扱いや解釈をめぐって、本書に対しては種々別解や異論があるにちがいないと思う。

私はこれらの諸学諸研究に蒙く、門外の人間であり、次にあげるのは本書において枝葉の枝葉にすぎぬ一文であるが、たとえば『日本書紀』『孝徳紀』にしろされる阿倍妃に関する解釈には無理があるように思われる。また鎌足の長男定慧の出家・渡航についても、別の見解があると思う。もちろん、梅原氏はその別の見解を、知悉した上で独自の説を出しておられるのであるが。

また、賀茂の河原屋については、これが比叡山東塔功德院の里坊であったという菊池勇次郎氏の説があることを記しておこう。

ただし、私にとって関心をそられるこの問題をめぐり、私自身はまだ調査をおこなう

にいたっていない。また東大史料編纂所長にされた菊池氏にお教えをうけたくても、氏は故人になってしまわれた。

このような状況ではあるが、もし菊池氏の説どおりであるとしたら、『法然の哀しみ』における梅原氏の推定とは異なり、功德院皇円と法然様との師弟関係にも、修正しなければならぬところが出てくるのではないか。

そしてさらにこの問題は、『醍醐本』『別伝記』には省略され、出てこない法然様の伝記があることへともつながっていくと思う。梅原氏がしるしておられるように、『別伝記』は叡山における法然様の師として慈眼房叡空の名のみをしるし、四十八巻伝等がしるす持法房源光や功德院皇円のことはしるしていないのである。

以上、本書において引用駆使される諸史料諸伝承の解釈や扱い等をめぐっては、別解や異論もあるにちがいないことを念頭においた上で、私が何といっても知りたいとおもうの

は、法然様の登山を父上の事件以前のこととする「別伝記」の記述を、全面的に信頼してよいかどうかということである。

出家受戒を登山以前のこととする「別伝記」の記述は、梅原氏も述べておられるように、聖光房弁長が直接、法然様から伺ったこととして『徹選釈集』のなかでしるす房名の由来、つまり「法爾法然」に道心を発したゆえに法然という名を授けられた、ということと矛盾しない。

だがもし「別伝記」以外の伝記がしるすように、父上の事件以後の出家受戒とするならば、弁長が法然様から直接聞いたことだとするべし、房名由来を、どう解釈するか苦しいものになると思う。

それとも、「別伝記」の記述はともかく、法然様の道心は父上の事件後、事件とは関係なく、文字どおり「法爾法然」に発ったとみるべきであろうか。

『法然の哀しみ』に触発され、ここまでしる

してきて、右のように、つまり父上の事件とは関係なく「法爾法然」に道心が発こった、と解釈することもあながち不可能ではないように今私は思いはじめてもいるのだが、しかし、やはりそうはいつても、弁長がしるす法然様房名の由来を素直に読むならば、このおことばは自然の流れとして、出家受戒後に父上の事件が起きたとする「別伝記」にむかつていくように思う。

このあたり、御生涯を辿るときの大きな謎であり、小説家ならば、事件を出家後のこととするにせよ、出家以前のこととするにせよ、『徹選択集』がしるす房名由来をどう読みとり、位置づけ、解釈するかということもふくめて、想像力を大いに刺激されるところであるにちがいない。

ただし、私は梅原氏が説かれるように、登山後に父上の事件が起きたと考えることで、その後二十五年におよぶ、道に迷い道を求めた闇夜の歳月が、より理解できることはたし

かであるように思う。

あの、四半世紀にわたる救いを求めての苦悩の歳月を法然様に送らせることになったのは、やはりそこに、父上の生と死に対して発された痛切な問いがあったからではなからうか。

ただ、弥陀の慈悲と衆生救済の問題という宗教者としての普遍的課題と取りくみ、悩まれたというよりも、夜明けを迎えるまでの長い歳月、心身を切りさいなむ苦悩と煩悶に耐え抜かせた根源には、父上あるいは父母の問題があつたとみるほうが、より自然なのではなからうか。

もとより、二十五年にわたる苦悩と求道の出発点に、まず父上の事件があつたのではないか、とするすからといって、私は法然様のその四半世紀にわたる歳月に水をさすものではないさかもない。

一般化され、抽象化された諸々の理念は、人が、己れの身辺に起きた直接体験をとおし

てその人のうちに取りこまれ、受肉していくものなのだ。そして私は、梅原氏の時国殺害事件を法然様の出家直後に起きたとみる説によって、いっそう深く法然様のその後の苦悩を感じ、何か襟を正させられるような厳肅な思いに打たれたのである。

梅原氏の著書を読む以前、今にして思えば、あの暗夜における法然様の苦悩は、私のなかで内在化されておらず、いまだ外在的なものであったと思う。したがってその御生涯について、なお表面的な理解にとどまっているところがあつたと思う。

とまれ、たとえ時として史料や伝承の扱いや解釈に、推理小説的性格をみせるところがあるにしても、この書によって、私のうちに法然様へのいっそうの愛と畏れと、共感と讃嘆の心が深まったのは否めない。

推理小説的趣きといえ、本書には安楽住蓮事件の真相をめぐって、興味津津たる説が展開されている。陰の首謀者は、一面、法然

様の理解者、同情者であつたかにみえる慈円だというのである。

このあたり、推理作家に比肩する梅原氏の推理が存分に発揮されているところの一つであり、読者をして慈円の『拾玉集』へとむかわしめる力をもつ。

三、

ところで、本書にいっそうの深みと輝きを与えているものは、さいごの三章がさかれて法然様と悪の問題、あるいは二種廻向の問題が追求されていることだろう。

『歎異抄』は親鸞の弟子唯円が師の教えをしるしたもののだが、まず悪の問題についていえば、その第三条に次のような一文がある。

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もともと往生の正因なり。よて

善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき」

この一文は、従来さいごのことばだけが全体からは切りはなされて、悪人正機説として世に喧伝されてきた。そして長く、このことは親鸞様の教えの核心であり、浄土真宗の信仰の真髄であるといわれてきたが、近年、実はこれは、すでに法然様がおっしゃっていることばであって、親鸞様は法然様のことばを継承されたのであることが、『醍醐本』の記述によって判明している。

父時国殺害事件を入山後のことと伝える源智の記述に端を発して法然様の御生涯をみつめてきた著者が、さいごの三章にいたり、精魂こめて批判するのは、近代浄土真宗学における悪人正機説の底の浅さである。

近代浄土教、とくに近代浄土真宗学は、法然様が教え、親鸞様に継承された「いわんや悪人をや」の「悪」を、「不倫の罪」・放縦な性欲の罪、に還元してしまった、と著者は

いう。そして氏は悪人正機説の信者の懺悔の涙に、阿弥陀の慈悲に甘えた偽りの涙を感じるといい、「悪」を、「多く不倫の悪」に還元してしまった時代的要因として、大正デモクラシーの影響をあげている。

ところで、法然様が直面し、親鸞様が直面した「悪」は、「不倫の悪」というごときそんな「甘い」ものではなかった筈だ。

それは何よりもまず、「殺人の悪」であると梅原氏はいう。二人の始祖のことばからは、「人が人を日常茶飯事のように殺す修羅場を見てきた」人間の、「深い底知れぬ恐ろしい体験を感じさせる」「悪への深い自覚が認められる」。

それではなぜ、始祖たちの教えの核心にあったこのような「悪への深い自覚」が、ほしいままの「性欲の罪の自覚」「不倫の自覚」というごとき、甘えたものに歪小化されてしまったのか。

梅原氏がそこに、大正デモクラシーの影を

みていることは右にしるしたとおりだが、これに加えて氏は、近代の悪人正機説が流布する上で、決定的役割をはたした近代真宗学において、「二種廻向の説」が排除されたからだと述べている。

つまり、近代人の理性にとつて、死後の世界さえ疑わしいものに思えたのに、ましてや浄土に往った者が衆生を救うためにふたたび現世に生まれ直してくることを主張するなど、浄土信仰の上にさらに信仰を上乗せするようなものに他ならない。

そこで、科学がバラ色にみえた近代人の一人として真宗学者たちは、「二種廻向の説」を排除し、「不倫の悪」からの救いという、世俗的な、分かりやすいとともににはなはだ底の浅いものに、信仰を堕としてしまったというのである。

しかし梅原氏によれば、「二種廻向の説」こそは、浄土宗学、浄土真宗学双方にとつて、「悪への深い自覚」とともに教学の中心であ

り、関係緒史料が示しているように、法然様自身、二種廻向によつて救われた人々の共同体の輪がひろがつていくことを夢み、親鸞様はこの教えを承け継いでいった。

ところで、終りちかい「親鸞からみた法然」の章で梅原氏は、法然様にはどこかに美的浄土教の名ごりがあつたがこれを親鸞様は一掃したといい、親鸞様は、法然様においてはまだ残っていた自力と美的浄土教の匂いを一掃して、自分は新しい浄土教を立てた、と『教行信証』『化身土巻』のなかでひそかに語ろうとしているのではないかという。

もとより、これはあくまで氏の推測であつて、このあたり、教学に蒙り人間ながら私には、梅原氏が「三昧発得記」や「観経」にとられすぎて、結果として法然様を見失うことにもなっているのではないかと思えてならない。それとも、このあたり、勇み足にすぎたというべきか。

たしかに「化身土巻」では、二種廻向がね

ばりづよく追求されていよう。

そして、これに關していえば、師が心中深く抱き、師の思想や信仰の中心であるところのものを、歪めることなく承けつぎ、これを言語化すべく努めることは、弟子の役目である。

そして親鸞様は、生涯かけてこの役目を果たされた御方であつた。

四、

さいごに、ペンを置くにあたつてしるしておきたいのは、梅原氏が指摘する近代の悪人正機説についてである。

その内容は、氏が指摘するとおりであろう。私自身、長い間、「悪人正機」を「不倫」と關係づけて理解していた。

したがって、親鸞様あるいは日本仏教の代表的流派といえる浄土真宗といえば「悪人正機」、「不倫の悪」、ということになり、その通俗性と底の浅さに心惹かれるところが全く

なかった。

名高い曉鳥敏の著書をよんでも、どこかに自己劇化と、甘えと、大仰な身振りを感ぜないではいられなかった。賛同し、心動かされるところ、あえていえば皆無であつた。

この私は、法然様から親鸞様へと継承された「悪人正機説」が本来もつていた、「悪への深い自覚」と「二種廻向の説」を、近代真宗学は回復しなければならぬ、と説く梅原氏に、深い共感をおぼえる。

それはとりも直さず、宗教が宗教としての超越性を回復せよ、ということであろう。

今、われわれが心していかなければならないのは、浅薄な通俗次元で世に流布してしまつた「悪人正機説」に、それが本来もつていた超越性と深い宗教性を、とり戻していくことだと思ふ。

編集部から依頼された枚数を大きくこえて、このように長くしたためてしまうことになつたが、それだけの挑発力を読者に対して

もつ『法然の哀しみ』であった。

(後記) 梅原氏は『法然の哀しみ』につづいて、シリーズ「浄土仏教の思想」の一卷として、あらたに「法然」を書き下ろし、刊行された。

前著『法然の哀しみ』では、法然様の主著『選択集』に還相廻向についての論及が少ないことの指摘がなされていたが、『法然』においてはこの問題に対し、人の思想も信仰も、人生の歩みとともに当然深まり、あるいは変化していくのであり、還相廻向の思想は、『選択集』以後、安楽住蓮事件をへて法然様のなかに深まり、二種廻向を信仰の中心にすえるころは、親鸞様を待たずして、やはり、晩年の法然様においてすでに確立していた、という見解が述べられている。賛意を表したい。

後記を付したついでに、くり返しになるが

もう一度しるしておきたいのは、時国殺害事件を登山以後のこととする『醍醐本』の記述が、なぜ、他の諸伝に一つも引き継がれなかったのか、ということである。

事件を登山以後のこととしても、法然様のマイナスになることは無いと思われるのに、なぜ、『醍醐本』以外の諸伝は、こぞって事件後の登山としたのだろうか。法然様没後百年以内の往時、これについての『醍醐本』の記述は、まちがいでないと弟子たちは考えていたのだろうか。

これらのことは、『醍醐本』の信憑性の問題とかかわっているだけに、一日も早く謎が解明されることを願う。

(東京経済大学教授)

自分を（他人に）与えるな。
自分を捨てるな。

【相応部經典】Ⅰ・八・八

主人は私

「使いすぎに注意しましょう。ご利用は計画的に」

最近、サラリーマン金融業者の広告に見かける一文である。

親切といえは親切ではある。業者にしてみれば一人でも多くの人に、一円でも多く貸したほうがいいに決まっているのに、その思いをグッとこらえて「使いすぎに注意しましょう」とは。本来なら「どんどん借りてどんどん使いましょう。景気回復のカギはあなたが握っています」とでも書きたいところだろう。「吸いすぎに注意しましょう」、「お酒は楽しく適量を」もこの類だ。

このような「親切な」ただし書きが添えられるようになったことには重大な背景がある。借りるは借りたが、さまざまな理由から返済不能となる人、はじめから返す気持のない人があまりにも増えているからである。資本主義経済の大原則に真っ向から立ち向かうようなただし書きは、借りる側の責任感の下落が書かせしめたと受け取れる。貸した側も損害を被るが、借りた側も重いカセを引きずりながらこの先を歩んでいかなければならない。吸いすぎ、飲み過ぎ

は業者には損害はないかもしれない(最近の欧米ではそうでもない)が、自身の体をこわす図式にはまりこむことになる。

だいぶ遡るが、「赤信号、みんなで渡れば恐くない」のコピーが流行った時期があった。人間の深層心理をずばり言い得ている妙句と評せよう。

何かにつけ、都合の悪い状況で自分に都合のいい結果を引き寄せようとする際、必ず働く「赤信号…」の心理。その時点では何とか言い訳を練り上げて正当化しようとするが、しかしその時、すでに「わたし」という主人の存在はかなり希薄になっているとは言えないだろうか。

ものごとを判断するのは他ならぬ「わたし」という主人。たしかに、主人の判断通りに体を動かしたくとも、いつも言うことを聞かすことができるに限らないのは凡夫の凡夫たる所以、悲しさであろう。「わかつちやいるけど…」である。

ともあれ、主人をあまりにも安易に他に与え、捨てていることが、

なんと多いだろう。

自分自身の価値をどれほど貶めているであろう。

私利私欲のみが目映ってしまうと、よくないと判断はついていてもついつい迎合してしまう私がいる。

おそらく、釈尊がこのわずかな言葉にこめたのは、あなた自身の大切さを忘れてはならない、ということだったに違いない。なめらかな坂ではあっても、一度転がりだした玉はなかなか止まらない。坂に身を置くか否かの選択は、私自身にゆだねられている。

自社の収益減にさえつながりかねないことを承知で、人としての生き方までも考えさせてくれる慈悲深い(?) アドバイスと、企業の度量の大きさに敬意を表したい。

(小村正孝)

連載

『くすり箱』^⑥

体力低下と薬草

薬剤師

市川真人

夏場の暑いこの時期は、年齢に関係なく疲れやすくなりますが、年齢が上がり、体力の低下してきている人ほど、しのぎにくい季節ではないでしょうか。

ふつう、人間の全体的な体力の低下は、四〇才ぐらいからはじまるといわれますが、実際には、筋肉は二〇才ぐらいから低下しはじめます。血管は七才がピークで以降機能が低下していくといわれています。もちろん個人差もかなりあります。ある学者の出した数字によりますと、二五才での体力差は四年と聞かれています。つまり二三才の体力の人から二七才の体力の人までいるという体力のひらき

があるようです。これが四五才になると体力差は一二年といわれていて、体力のあるほうの人は三九才、ないほうの人は五一才の体力ということになります。さらに六〇才になると二〇年（体力のあるほうの人は五〇才、ないほうの人は七〇才の体力）もひらいてしまうそうです。ということで、年とともに体力の個人差もどんどん大きくなるということです。

いつまでも健康で、又、若々しくありたいという思いは、人間だれしも、又、洋の東西を問わず、昔も今も変わりはありません。

不老長寿の薬といえば、中国は類をみない

宝庫といえます。中国で幅広く使われているものの一つに『首烏片』があります。

この『首烏片』の主原料の何首烏^{かしゅう}（和名「つるどくだみ」タデ科の塊根^{くわいこん}。葉がドクダミ「ドクダミ科」に似ていて、蔓性であることからこの名がついたといわれています。）は、白髪や脱毛の悩みをもつ人に効果のある薬草として有名です。ほかにも血中のコレステロールを低下させ、動脈硬化を予防する作用、心臓の機能を強め冠状動脈の血流量を増やす作用、血糖下降作用など、成人病を予防し、老化を食い止めるさまざまな効果が報告されています。他にも抗菌作用、腸の蠕動運動促進作用などがあります。

さらに少し前ですが、福岡保護環境研究所のスタッフが何首烏に発ガン抑制効果を発見したとの新聞報道もありました。中国の明時代の著書「本草綱目^{そうぼうこうもく}」には、既に「何首烏は腫瘍やルイエキ（リンパ腫など）に効果がある」との記載があり、はからずも古人の経

験則の確かさが証明されたことになりました。

『首烏片』は、漢方というところの肝と腎を養い、増血作用のある薬で、手軽な価格で購入できる滋養強壮剤として、中国で幅広く愛用されていると聞いています。日本でも、お年寄りや体力の弱い人向けの便秘薬、強壮剤として売り出されていますが、抗老防衰からガンの予防にまで、その利用価値はとても高い薬だと思います。

抗老防衰・不老長寿の漢方薬は、その人の体質によって違います。他の漢方薬としては、元気の源であるところの腎を元気にする八味地黄丸、至宝三鞭丸、海馬補腎丸等、又、流れの悪くなった血液をサラサラ流す冠元顆粒。血液を温め、血液を補い血行を促進する婦宝当帰膠等が考えられます。他にも薬はありますが、これらを上手に組み合わせ、少しでも体力の低下を遅らせて下さい。



暑中お見舞申しあげます

平成十三年

浄土門主
総本山知恩院門跡第八十六世
中村康隆

大本山増上寺
法主
成田有恒

大本山金戒光明寺
法主
坪井俊映

大本山百萬遍知恩寺
法主
大野忍敬

大本山清浄華院
法主
大田秀三

大本山
光明寺

大本山善光寺大本願
法主
鷹司誓玉

暑中お見舞申しあげます

平成十三年

浄土宗務総長

水谷 幸正

浄土宗議会議長

江口 定信

浦安市堀江四—十四—二

浄土宗東京事務所長

袖山 榮眞

〒200-866 長野市西後町一五六八 十念寺

大吉寺住職

成田 昌憲

〒154-0007 世田谷区世田谷四—七—九

平成大事業勸募懇請中
御影堂屋根替大修理完成
ひきつづき阿弥陀堂新築再建

美作 誕生寺

〒202-8666 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七 (二八)二二〇二
FAX 〇八六七 (二八)二二六二

〒102-0002 東京都文京区小石川三丁目
十四番六号

無量山 傳通院

TEL 〇三(三八一四)三七〇一(代表)

定義如来

西方寺

〒202-0002 仙台市青葉区大倉字土下—
電話 〇三三(三九九三)二〇一一
HomePage: <http://www.johg.or.jp/>
E-mail: saihouji@johg.or.jp

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山
實相寺

〒430-0808 静岡市鷹司二丁目二十四番十八号

玉桂山
華陽院

電話〇五四・二五二・三六七三
FAX〇五四・二五一・三六五六

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳大学 淑徳短期大学
理事長

長谷川良昭

〒174-0808 東京都板橋区前野町五一五一二

淑徳学園中学校・高等学校
校長

大谷壽雄

総本山知恩院
おてつき運動 推進部長

東海林良雲

塩釜市雲上寺

浄土宗大願寺住職
浄土宗宗議会議員

神谷英敏

〒402-0802 函館市銭亀町一〇一

花巻 廣隆寺

谷地玄雅

正覚寺

住職 江藤英賢

〒915-0803 武生市京町二一八
TEL (〇七七八) 二二・一三一九
FAX (〇七七八) 二二・六一一七

暑中お見舞申しあげます

平成十三年

和歌山・西念寺

武田 脩彦

〒642-0001 和歌山県和歌山市西念寺

宗議会議員

河本 眞龍

〒550-0001 茨城県水戸市橋本町四二
電話〇八三八・二二二・五八七

宗議会議員

浄土宗政研究会々長

熊谷 靖彦

佐賀教区本應寺

宗議会議員

浄土宗平和推進協議会副理事長

小田 義海

九品院住職
佐世保市大和町一八八一

青森教区
青岩寺

青山 浄晃

弘経寺住職

金田 進徳

〒990-0001 茨城県取手市白山一九一・二八

孤峰山 蓮馨寺
諸願成就 吞龍上人奉祀

糸原 恒久

〒550-0001 川越市連雀町七・一
電話〇四九二・二二二・〇〇四三
FAX〇四九二・二二二・〇六七六

浄土寺

阿川 文正

〒100-0001 東京都港区赤坂四一三・一五
電話〇三・二三三・三六三〇

暑中お見舞申しあげます

平成十三年

明福寺

福井豊信

〒132-0031 江戸川区江戸川三十八-一

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

愚鈍院
住職
こつぶがや文庫主

中村眞道

〒820-0804 仙台市若林区新寺三十二-二十七
電話〇二二-二五六六〇五七

宗源寺

齋藤价洲

函館
称名寺

〒060-0806 函館市船見町十八-十四
電話〇一三八-二二二〇五七四

勝願寺

〒550-0806 埼玉県鴻巣市本町八十二-三十一
電話〇四八-五四二〇二二七

骨仏の寺

一心寺

〒530-0806 大阪市天王寺区達阪二-八十六十九
電話〇六-六七七一〇四四四

晴雲寺住職

塚田弘導

〒520-0806 平塚市立野町六-五
電話〇四六三-二二二二六三八

貞松院住職

山田和雄

〒227-0801 諏訪市諏訪二一十六-二十一
電話〇二六六・五一・一九七〇

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0001 品川区南品川二・一・十二

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒222-0202 鎌倉市長谷四一・一二八
電話〇四六七・一一・〇七〇三
FAX〇四六七・一一・五〇五一

天光院

真野龍海

<http://www.evam.ne.jp/tenkoin>
ryumano@venus.dti.ne.jp

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四十二-一八

横浜

大光院

〒222-0202 横浜市南区三春台一三九
電話(〇四五)二四一・七六七六

浄土宗東京教区教区長
光取寺住職

大室了皓

〒140-0001 品川区上大崎一・五十一
電話〇三(三四四)八三八四

ポケット版

施餓鬼會／棚経

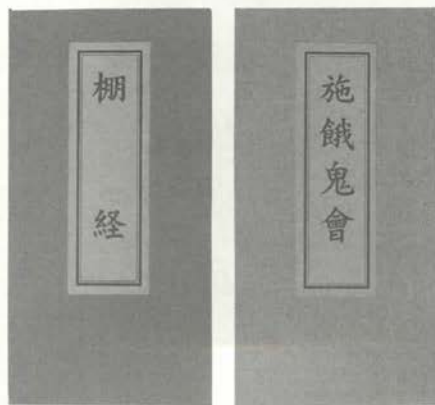
こんな経本がほしかった

初めてのお盆の棚経もこれ1冊で大丈夫。

慣れないお施餓鬼会の随喜も、これなら便利。

現場から生まれた、現実的内容と手頃な大きさ。

定価…1000円（送料、税込）
5冊以上で1冊800円（送料別）



サイズ
（縦15.1センチ、横7.8センチ、厚さ8ミリ）

◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 戒法寺内

TEL:03-3441-8971/FAX:03-3441-8702

郵便振替 00150-8-158563 ふじゅせん刊行会



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〔特選〕

●手
汗の手を握りかえして介護かな

長尾 子狼

「手当て」という語は、辞書的な解釈とし

ては病氣やけがの処置を指すが、手を当てる
という行為は、もっと多くのものを含むよう
な気がする。この句の握りかえすということ
にも、通り一遍の介護でないものを感じる。

〔佳作〕

観音の御手すらりと新樹光

河合富美枝

湯加減をみる手ゆらりと夏の宿

福島 祐子

れんげ摘む老僧の手に日はそそぐ

山口 信子

●街

〔特選〕

桐咲くや未だ不況の機の街

周東 澄江

バブルがはじけて久しい。不況々々と言っ
ている内に、二十一世紀に入ってしまった。
いまだにいつ抜けられるかの見通しもつかない

選者=増田河郎子

〈特選〉

山上の新緑の隙大河見ゆ

野村 昭輝

●自由題

い。紡織の世界はその影響を受けやすいものの一つである。好転が待ちどおしい。

〈佳作〉

街路樹の夏めく光出勤す

三島 明

街角を曲れば豪邸つつじ燃ゆ

三ツ橋仁平

名ばかりの商店街やつばくらめ

小久保あきを

〈佳作〉

参詣の客が鐘打つ日永かな

杉田 匡弘

安達太良の風を遊ばす代田水

佐藤 雅子

廊磨く奉仕の後の柏餅

金谷 友江

新緑の木々に覆われているのだから、高い山ではなからう。登りきると、木の隙を縫うように大河が横たわっている。高くないとは言え、登ってきた疲れはあるうが、一気に癒やされていく思いがしたに違いない。

浄土誌上旬会のお知らせ

坂色自由題

②孝語ではありません

締切・七月二十日

発表・『浄土』十月号

選者・増田河郎子（「南風」主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

手

子供の子どもが握る手巻ずし
子の手より離れし風船空が呑む
表見せ裏見せ病臥の手の透けり
さくらんぼ術後の夫の掌の凹み
片麻痺が羨むややの手の動き
柳の花や山雨手走る今朝の宿
焙烙に手作りの新茶匂いけり
傷つけし右手かばいて梅雨に入る
糟袋双手に梅雨の廊磨く
手触りのよき作務衣出し更衣
手の五指も摘む葉草もよき名持つ
春疾風思わず夫婦手を繋ぐ
泳ぐ亀土手のつづくに池めぐる

河合富美江
細田初枝
佐藤雅子
中島富士子
中島一子
山本のり子
山本美代子
周東澄江
金谷友江
大場清
片桐てい女
橋本歩々
佐々木はすき

街

我を追い越し長き脚らが初夏の街ゆく
歩す人のまばらつゆめく蔵の街
街中に残る都電の涼しきよ
桐の花つすむらさきに街昏るる
ビルの増え日暮れの早き街の路地
駅を背にはじめての街青嵐
夫といて見知らぬ街に憩いけり
機街の五月はじまる川の照り
開港の昔を憶ぶ異人街
軒先も新緑に染め鯖街道
自由題

船洗う漁夫の素足や夏近し
寸程に伸びし早苗の湿りかな
喪服ぬぎ衣桁にかけし若葉冷
何思ふ蟻の行進遊もどり
葛若葉住まざる家の屋根覆つ
新調の自転車連ね一年生
剥落の山門に光る若葉かな
木の芽冷え脱いだ上着を又重ね
師の句碑に沿ひし水音夏はじめ
月天心立ちて寝入りしこのぼり
今朝の雨開きし牡丹惜しみ切る
風化せる流人の墓や都草
母の日や遺品の櫛に母の艶
青嵐浄土はるけき「つばさ」橋
花しべをかざしに留めて法事客

島谷ときを
小林恵美
北川弘子
中村よみ子
石原新
加藤政男
谷しげ子
大村和代
藺田郁子
増田信子
野村多加子
細田初枝
中島富士子
片桐てい女
松田匡弘

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

刹那

「せつな」と読み、瞬間のことを言います。もともとサンスクリット語の「クジャナ」で、漢訳では「念」「念頃」と表わされます。

意味は時間の最小単位で、とても短い時間のこと。「大毘婆沙論」では七十五分の一秒。あるいは一弾指（指をばちんと一回はじくこと）の間に六十五刹那が過ぎるという時間です。

この刹那の積み重ねが今であり、刹那の積み重ねが明日を作ります。今を大事にすることを教えてくれている覚えておきたい言葉です。



編集後記

白靴を踏んでも気づかぬ人はかり 代潤

先日ある会合でウタリ協会の人が東京都の人権課の課長に質問をした。

「あなた方が書いている文章、『アイヌの人々』という表現は、差別的表現ではないのか」

人権課の課長は言葉を失い、返答はなかった。私もその場では答がわからず、後で識者に聞いたところ、アイヌは場所を指すことではないので、アイヌ民族もつと云うなら「先住民アイヌ民族の人々」といわなければ、長い間蔑視語的に使われ続け、差別に苦しんできた彼らに対して、失礼な言い方になるのだということを学習した。

アイヌとは神に対する人を意味し、人間らしい人間、智慧に富み感性が豊かな人間を指す言葉と、アイヌ語辞典にはある。しかしその言葉を、一音どう音を離して発音するなどの悪質な差別が今でも行われ、現代でも七割以上の人々が差別の経験を経験する。

和人が土地を奪い、同化を強要し、学校や地域社会、就職や結婚の際の差別を平然と行い続けている現状を、我々は少しでも知る必要がある。現状を理解しないものが、彼に思い過こしたなどと言えるはずがない。異文化の人々との共生こそが、人権文化にとってのもっとも大事なところだといえる。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十七巻七・八月号 頒価六百円
年会費六千円

印刷

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

発行

平成十二年六月二十日
平成十二年七月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーディーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行者

法然上人鑽仰会

電話〇三三三七八 六九四七
FAX〇三三三七八 七〇三六

振替 〇〇一八 〇八八二 八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



夜間近し、静かに



足元注意



踏切あり



歩道口



踏切



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわらな



われ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店で。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人顕仰会まで。

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

- 水晶数珠 ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
プレスレッド ④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届けまでおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届け時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

- 大(320×183ミリ)
1,260円(送料別)
小(273×142ミリ)
480円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届けまで4週間かかります)

